

ディレクター日誌 (活動・研修生の様子)

期 日：平成30年11月3日(土)～4日(日)【1泊2日】

場 所：阿武町町民センター周辺 (阿武町奈古)

参加者：小学校5・6年生15人 (男子7人、女子8人)

1日目「開会式・仲間づくり・キウイ農園での仕事・夕食作り・ミーティング」

期 日：平成30年11月3日(土)

場 所：阿武町町民センター ～ キウイ農園

テーマ：「仲間との出会い、そして、仕事を知る」

ジョブプログラムが初めて阿武町で開催される。日本海に面し、豊かな自然に囲まれた阿武町では漁業や農業などの第一次産業を大切にする風土が今もある。県内の小学生が、この山陰の地阿武町で、仕事を通してどのような経験や学びをするのか、このプログラムに初めて参加する私自身も期待が膨らんでいた。

11月初旬。朝は気温の低さを感じるが、空は雲一つない見事な快晴である。

会場の準備を終え、午前8時半を過ぎると、町民センターに子どもの姿が見え始めた。開会式は9時30分からなのに随分と早い。それもそのはず、今回はこの山陰の地に遠方の下松市や岩国市、下関市から参加している子どもたちがいる。保護者の方も不慣れな道を時間的余裕をもって来られたのが分かる。県内各地からの参加、改めてこのプログラムの人気を知る。

受付に近づいてくる保護者と子ども、さあ！一歩を踏み出した子どもたちのチャレンジが始まった。中にはサマースクールに参加経験のある子どももいるようで仲間と出会う久しぶりの挨拶を笑顔で交わしている。でも、ほとんどの子どもは初参加らしく緊張感からか顔の表情が硬い。受付が終わると保護者は会場後方の保護者席へ、子どもたちは案内された班へ向かう。1班は「きくさん」と「たけさん」が、2班は「どのさん」と「しんさん」が迎える。「朝ご飯は食べてきた？」「体調悪いとこない？」「キャンプネーム何にする？」、子どもの緊張をほぐすように話しかける。そのうち、また次の子どもたちが続々とやってきた。まわりは知らない小学生、これから2日間一緒に過ごす仲間との出会い、まだ話しかけることもできない緊張はあるが、子どもたちの目は親を求めているようではなかった。

さすがこのプログラムに応募してきた小学生。そしてまた、そのわが子を後方からじっと見ている保護者の目も、同じようにチャレンジをしているような気がした。



15人全員がそろい、ジョブプログラムの開会式が行われた。主催者を代表して社会教育・文化財課の班長が挨拶をされると、いよいよ始まった！という電気が参加者に流れ始

める。開会式は終わり、保護者に別れのあいさつをする間もなく、班での活動がスタート。これから8人（1班）、7人（2班）で2日間、全てを乗り越えなければいけない。「そのためには始めに何をしなければいけない？」班つきの指導者によって、子どもたちは少しずつ導かれる。「まずはこの仲間を知らないといけないね」ネームトスで笑顔がこぼれ始める。最初に行ったアイスブレイクの活動によって仲間との壁が次第になくなっていった。「次は目標を立てようか！」自分の目標を書いて、仲間にも知ってもらおう。仲間の目標を聞くと、また自分も頑張ろうって思う。「高め合えるのもきっと仲間がいるからだろうね。」そんな指導者のタイミングの良い言葉かけが子どもたちの背中を押して、いよいよジョブ（仕事）へ出発する。

今回のジョブの場所は、阿武町の特産、キウイフルーツを生産されている田原一男さんと敏子さんご夫婦の農園。町民センターから少し離れた山間部の農園に班ごとに移動した。子どもたちは、仲良くなるのも早いなと感心するほどお互いの距離が近くなってきており、楽しそうな会話を聞いているうちにあっという間に農園に着いた。子どもたちとインストラクターは、すぐに農園に訪問せず作戦会議をしている。「最初はどうする？」「お願いをするならどうやってするの？」「農家の方も忙しいから断られるかもしれないよ？」インストラクターが子どもたちに考えさせる。子どもたちなりに考えがまとまったようだ、倉庫前で作業をしている農家の田原さんを訪ねた。田原さんに初めて出会い、挨拶をして、仕事を手伝わせてほしいこと、労働の対価として自分たちの夕食の材料を分けて欲しいことを伝えた。静かに聞いていた田原一男さんが口を開く。「食用のキウイはまだ収穫時期ではないので、今、私たちが作業しているのは、小ぶりの加工用のキウイを収穫すること。加工用のキウイは80g以下となっていて、80g以上はまだ収穫してはいけない。これは、簡単そうと思うかもしれないが大変な作業で、キウイ狩りを楽しむのとは訳が違う。遊びのつもりなら帰ってくれ。」田原さんの予想外の厳しい言葉に一瞬子どもたちはたじろいだ。第1のハードル。「それでも、一生懸命やります。やらせてください。お願いします。」子どもたちの心が言葉となって出た。



その子どもたちの表情を見て、田原さんは説明を始めた。「ここに秤がある。キウイを乗せると何gかを示す。これは70gのキウイ。これは・・・50gのキウイ。50g以下ぐらいだと君たちも大きさを見ただけでわかると思う。80gの以下の基準の大きさをよく確認して収穫するように。」次に来た班にも同じように説明して、田原さんと子どもたちはキウイ農園に入った。そこには、学校のグラウンドぐらいの広さの敷地に、背丈ぐらいに伸びたキウイのつるが何百本と生えており、その先に見事なキウイフルーツが数えきれないぐらい実っていた。初めて見るキウイ農園に子どもたちは興奮した。どれも今すぐにも食べられそうな気がしたが、キウイは収穫してから発酵（熟成）が始まる果物で、収穫

しても数週間は酸っぱくて食べることができない。しかし、ごく稀に木になったまま熟成して柔らかくなり食べられるものもあるから、それは食べてもよいと田原さんは付け加えた。収穫の仕方を教わり、班ごとに秤とキウイを入れるケースを渡され、ここから子どもたちのジョブ（仕事）が始まった。

初めて触れる農園のキウイ、誰もが嬉しそうにキウイに手をかけていた。果実をひねるだけで簡単に獲れるので、子どもたちは次々とキウイを収穫していった。班の仲間と大きさを確認しながら、秤も使って、「これは68g！これは75g」と協力して計測している様子もあった。時々、「柔らかいキウイないねえ、食べたいのに」という声も聞こえた。1時間ぐらい経った頃、段々と手際も良くなったからか、始めは班でまとまって活動していたが子どもたちは方々に広がりだした。しかし、ここで田原さんから集合がかかる。「加工用のキウイを収穫する作業は今日1日で終わるわけがない。



い。君たちみたいに、この農園内を適当に広がって収穫されると、どこまでが終わったところか分からず、結局は私たちが二度手間でもう一度見なくてはならないから困る。」インストラクターと子どもたちが集まって考える。では、どうすればいい？列になって自分の分担を決める等の意見が出た。班のリーダーが指示を出し、担当列を割り当てた。こうして活動するうちにお昼の12時となり、昼食休憩に入った。

この農園は、田原夫妻が10年前に雑木林を開墾して作られた。耳を澄ますと、傍を流れる清流の音と鳥の鳴き声が聞こえる静かな場所。子どもたちは、大自然の中にいることを実感しながら昼食を食べた。農園にはキウイだけでなく3m以上の柚子の木があった。田原さんに収穫の許可を頂いたので、高枝バサミを上手にを使って柚子の収穫を楽しむ子どももいた。

午後1時、仕事の再開。仕事内容は午前と同じ、加工用のキウイの収穫である。今回のジョブプログラムで子どもたちに課せられた仕事はこれ1つである。このジョブプログラムはただの体験活動ではない。仕事をとおして個人の成長と集団の成長をねらいにしている。仕事とは何時間も何日もかけてやっていることも子どもたちに知って欲しかった。午後の仕事の様子は、子どもたちのペースは慣れているぶん早く、次々とキウイをケースいっぱいにしていく。80g以上かな？と思われるキウイを収穫することもあるが、それもケースに入っていく。子どもたちの口数や笑い声も増えているように感じる。柔らかいキウイを熱心に探している男の子。それらをじっと眺めている田原さん。

午後3時、仕事の終了時刻。1班は8ケース、2班は6ケースのキウイをリヤカーに積み、田原家そばにある選果場へとみんなまで運んだ。随分たくさんのキウイを収穫したことに誇らしげな子どもたちであった。田原さんはお手伝いに来られている方と選果を行い、その間子どもたちは水分補給をしていた。10分後、子どもたちは田原さんの所に集合す

る。そして、青いかごを子どもたちの前に出し田原さんは厳しい表情でこう話された。

「このかごに入っているのは君たちが収穫した中に入っていた獲ってはいけない80g以上の食用のキウイである。それが100個以上ある。これらはもう食用として出荷できず、1個あたり50円の損失であること。それが100個であればどのぐらい損失するか考えてほしい。」

子どもたちは、立ち尽くし、その大きめのキウイをじっと見ることはできなかった。自分たちの仕事に対する甘さを痛感した瞬間だった。インストラクターがメンバーを集め、これからどうするかを考えた。田原さんに迷惑をかけたことを謝りたい、そして明日もまた仕事をさせていただけるようお願いしたい、子どもたちはそれを言葉と行動に移した。



昼間の労働の対価として田原さんから夕食の材料となる食材をいただいた。ジャガイモ、玉ねぎ、人参、キュウリ、お米、お肉、冷凍イカ、そして採れたての柚子に熟成しているキウイである。労働の対価にしては申し訳ないぐらいたくさんいただいた。再び、田原さんにお礼を言って子どもたちは農園を出発した。

町民センターに帰る途中、子どもたちは夕食のメニューを話し合った。夕食や朝食メニューのアイディアで盛り上がり、この頃になるとすっかり子どもたちの仲間意識も深まっていた。そして必要な材料をスーパーに買いに行った。町民センターに戻り、テントを設営する。今回は夜中の気温の低さも考えて、町民センターの屋内にテントを張ることに決めた。班員の力を合わせて、自分たちの寝場所が完成。夕食作りは軒下で行い、環



境に配慮し火気や用具も最小限の使用とする野外調理が始まった。メニューは両班ともカレーライスを中心とし、1班はサイドメニューとしてポテトサラダ、2班はキウイと柚子のフルーツポンチをメニューに加えている。材料から自分たちでメニューを考えるという試みは、子どもたちの食への興味を確実に掻き立てると共に、食材の有り難さや尊さを感じさせていた。慣れない手つきながらも、仲間



や指導者と一緒につくる時間は楽しそうで、子どもたちとインストラクターの距離もぐっと近づき、まるで仲の良い家族のようにも感じた。そして、班で協力して出来上がった夕食は、メンバー全員を今日一番の笑顔にした。夕食を食べ終え、手際よく片付けを皆で終えた。いつの間にか空には月が輝いていた。

各班に分かれ今日のミーティング（ふり回り）が始まった。2班の指導者「どのさん」は自分のハイポイント（頑張ったところ）、ローポイント（良くないなと思ったところ）を考えさせた。一人ずつの発表を「しんさん」がホワイトボードに書いていく。「では、今度は仲間の良かったところはどこだろう？」と声かけをして、自分だけでなく仲間のことにも目を向けさせる。それと共に、「その時まひろはどうだったの？」「なぜ、りおんは一人でやったの？」子どもたちの気持ちを内面から引き出す。「学校でもそういうことあるの？」子どもたちは日頃の自分の言動も振り返る。その後、



テーマは「仕事」となる。田原さんに迷惑をかけてしまったこと、なぜそうなったのか、自分たちの原因を考える。慣れによる気の緩み、仕事に対する考えの甘さ。僕たちは仕事に対して本気になっていたのだろうか。明日も同じ作業をお願いしている。しかし同じ事を繰り返して失敗しないために、自分たちはどうすればいいのか。子どもたちは考え、それぞれに自分の意見を伝えあった。1班でも同じ頃、「仕事」について考えていた。申し訳ない気持ちから重い雰囲気であったが、「きくさん」が明日に向けて前向きに考えることを促す。「たけさん」も子どもたちの心の動きを感じていた。楽しいだけの体験学習ではない。教育プログラムなので、失敗したとき、つらい時を自分たちで乗り越えたときに、ここに子どもたちの学びがあり、成長があるはずだと私たちスタッフ全員が感じている。時計は夜の8時45分を示し、1時間以上にわたるミーティングに



終止符が打たれた。子どもたちは就寝のためテントに入り、ホール内の灯りを消した。テント内から懐中電灯の明かりがともり、4つのテントは暗闇の中で幻想的に浮かび上がっていた。子どもたちなりの夜のミーティングでも始めるのだろうかと思わず微笑ましくも感じた。

子どもたち就寝後は、私たちスタッフも今日の振り返りを行った。1日目の日程を見直しながら、気づいた点を挙げていく。運営上の細かい反省点を挙げながらも話は次第に本題へと入った。今回初めて参加した「どのさん」も子どもたちと関わる中でジョブプログラムについての考えを述べた。子どもたちの出会いの時の目標が、みんなと仲良くなることや協力することに置かれすぎていたのでは？「仲間づくり」の目標は何か？「仕事」はツールであるがそれだけなのか？田原さんを怒らせてしまったことをインストラクターがその気持ちを汲んで伝えていただろうか？スタッフの熱い議論が展開されていく。そんな中、「しんさん」の意見は貴重であった。「受粉からキウイの実がなるまでの過程を間近で見てきた。傷一つ付くだけでも商品にならない。キウイの仕事は丁寧さを求められる仕事である。」と言われた。阿武町に住む「しんさん」だからこそ分かる農家の並々ならぬ苦労。学校の体験学

習では、収穫だけの楽しい部分だけを体験させることが多いが、それだけでは農家の苦労、そして生産者の本当の思いは分からない。このジョブプログラムは子どもたちだけでなく、私たちスタッフにとっても大きな学びであり、指導者としての在り方を考えさせられた。また、こうやって熱量をもって語り合える仲間と出会えたことが喜びであり、このプログラムの指導者のチームワークの大切さも改めて感じた。

2日目「キウイ農園での仕事、センターの掃除、ふりかえり」

期 日：平成30年11月4日（日）

場 所：阿武町町民センター ～ キウイ農園

テーマ：「振り返り、ジョブの総仕上げ」

東の空が紅黄色の朝焼けに染まる頃、子どもたちはもう目を覚まし動き出していた。今日も快晴、天気恵まれている。

子どもたちは、朝食づくりにとりかかる。昨日の野菜を使って味噌汁を作り始めている班があり、スクランブルエッグが登場する班もあり、子どもたちのアイディアの豊かさにつくづく感心した。「調理実習で、味噌汁の作り方習ったから！」得意気に女の子2人が上手に味噌をとかしている。朝食をしっかりと食べ、これからの活動に備えた。



テントの片付け、町民センターの清掃を済ませ、出発の準備も完了した。出発までまだ少し時間がある、ここで各班が集まってミーティングを始めた。

今日はいよいよ最終日、しかも残り半日。昨夜の振り返りの確認を、指導者は子どもたち一人ひとりの顔を見て話している。2班はこのミーティングで「しんさん」が田原一男さんの息子だということを明かしており、キウイ農家の「しんさん」だからこそ話せる思いを子どもたちに伝えていた。指導者の本気が伝わる。子どもたちにもきっと本気のスイッチが入ったにちがいない。そして、「きくさん」たち1班は円陣になりみんなでかけ声をかけていた。さあ、出発だ！

キウイ園の倉庫前で田原さんが仕事の準備をしていた。子どもたちは、田原さんの前に行き、再び仕事のお願いをする。昨日のお願いの時と表情が違う気がした、興味をもった表情ではなく、真剣な表情だ。田原さんもそれを感じて、仕事をする許可を出す。子どもたちはキウイを入れるケースと秤を持ち、キウイ園に歩き出した。その力強い後ろ姿が語っているような気がする・・・「今日は、昨日の失敗はしない！」

「キウイ狩り」ではなく、これは仕事。子どもたちは真剣な目でキウイを取り始めた。基準となる重さのキウイを片手に、大きさを確かめている。80g以上のキウイを取らないように慎重に選ぶ。取り残しがないように、班で列を意識して進む。集中を切らさないように、

仲間同士で声をかける。キウイに傷をつけないように、丁寧にケースに入れる。まるでキウイに愛情を注ぐように。田原さんは作業をしながら子どもたちの様子を見ていた。収穫のペースは昨日より遅いかもしれないが、真剣な表情で活動する子どもたち。いつしか時間は作業終了の11時となり、子どもたちは収穫したキウイケースを選定倉庫まで運んだ。

「田原さんに、また怒られるだろうか・・・」昨日の失敗がよぎる。すると、キウイケースの側に立っている田原さんが口を開く。「ご苦労様でした。このキウイは見ただけで80g以上のものがないのが分かるよ。」田原さんが笑顔を見せた。「今日は、君たちが真剣に作業してくれたので、本当に助かったよ。ありがとう。」田原さんの優しい顔を見て、子どもたちの顔も笑顔に変わる。そばで、インストラクターも微笑みながら頷いていた。こうして、子どもたちのジョブは終了した。お土産に、田原さんから熟成したキウイをたくさんいただいた。そして、キウイの美味しい食べ方も教えてもらった。それを語る田原さんはすごく嬉しそう、作物を愛する生産者の顔とはこういうことだなと感じた。子どもたちもキウイをまじまじと見ながら聞いていた。



田原さんに2日間のお礼を伝え、キウイ農園を後にした。田原さん夫婦が笑顔で見送っている。「いつかキウイを見たら、きっとここでの体験を思い出すね」「そうだね」女の子2人が手を振りながら話していた。

町民センターにもどり、2日間を感じたことや学んだことを振り返る最後のミーティングを行った。家族の方が、町民センターに集まり午後2時、閉会式が始まった。始めに、スライドショーで2日間の様子をみんなで共有。1日前は不安だった表情が、仲間や指導者と過ごし笑顔に変わっていく様子、楽しかった時間、苦しかった時間、子どもたちの豊かな表情が次々と映し出される。田原さんの笑顔、最後はキウイ農園をバックにみんなの集合写真でスライドショーは終わった。気づくと「どのさん」は熱くなった目頭を押さえていた。その後、子どもたちから一人ひとり感想が述べられた。自分の成長や仲間への感謝を言葉にする子どもたち。人前が苦手な自分が少し勇気を持って行動できたこと、班のことを思って行動してくれた仲間がいたこと、自分の役割を意識すること、協力することの大変さと大切さ、そして「ありがとう」の言葉を照れながらもほとんどの子どもが発表した。わずかな時間ではあったが小学生が本気で体験した「仕事」は、子どもたちにたくさんの学びを与えてくれた。家族の方も後ろで見守りながら、少し成長した我が子に拍手をしていた。



こうして、阿武町でのジョブプログラムは終了した。「チャレンジ」を合い言葉に、子ど

もたちも私たちスタッフもスタートした教育プログラム。たくさん失敗して、たくさん経験して、たくさん考えて過ごした時間は、本気で過ごした時間でもあった。この中で感じたこと学んだことを、子どもたち、そして私たち自身も今後の糧として活かしていきたいと強く感じる2日間であった。家族の方に、うれしそうにキウイを見せている子どもたちの後ろ姿がいつまでも遠くで揺れていた。

最後に、このジョブプログラムの実施に御賛同され多大な御協力と共に、ジョブの開催場所として御尽力いただいたキウイ農家の田原様に心よりお礼申し上げます。

【参加児童の感想より】

- 仲間と協力することは大切だと思った。
- 困った時に助け合えるので仲間は大切。
- 自分の考えを口に出して言えるようになった。
- 少し人見知りだったが仲間と話すことができた。
- 初対面の人にも声をかけられるようになりたいです。
- みんなで夜ご飯を一生懸命に作って食べたことが心に残りました。
- 「キウイ狩り」ではなく「仕事」ということで、けじめは大切だと思った。
- 田原さんが「よくがんばった」と言ってくれたことが心に残りました。
- 今回の経験を活かして難しいことでもチャレンジしてみようと思った。
- これからは、家で手伝いをするときは、途中で嫌になったり飽きたりしても終わるまでがんばろうと思った。
- 学校の人たちとも協力して何かを成し遂げてみたいです。

